

## 4. 食育（養護教諭）の事例

渡辺 誓代

事例1 「すっぱいけど、おいしかったよ」

11月9日（水）

前週末の体重測定の際、園庭の畑で栽培している二十日大根についての指導を行った。ようやく収穫できたため、弁当時間に酢漬けにした二十日大根を配りに年長組へ行った。

養護教諭 「今日は、二十日大根を持ってきました。Sさんに切って味付けしてもらいました。ほしい人は手を挙げてね」

幼児ら 「はいはい、ほしい。ほしい」（ほとんどの子が手を挙げた）

養護教諭 「わかったよ。みんなの分、あるから待っててね」（テーブルをまわった）

野菜が苦手なN児のテーブルに来た。

養護教諭 「N児くん、どれくらい？」

N児 「1枚でいい」

養護教諭 「わかったよ。はい。まだあるから食べれたら言ってね。K児ちゃんは？」

K児 「私、いっぱいほしい」

養護教諭 「はい、どうぞ」

一通りテーブルをまわると、

幼児ら 「もっとちょうだい。おいしい」

養護教諭 「じゃあ、もう少しずつあるから配るね」

N児 「僕もほしい」（にこにここと弁当箱を持って話しかけてきた）

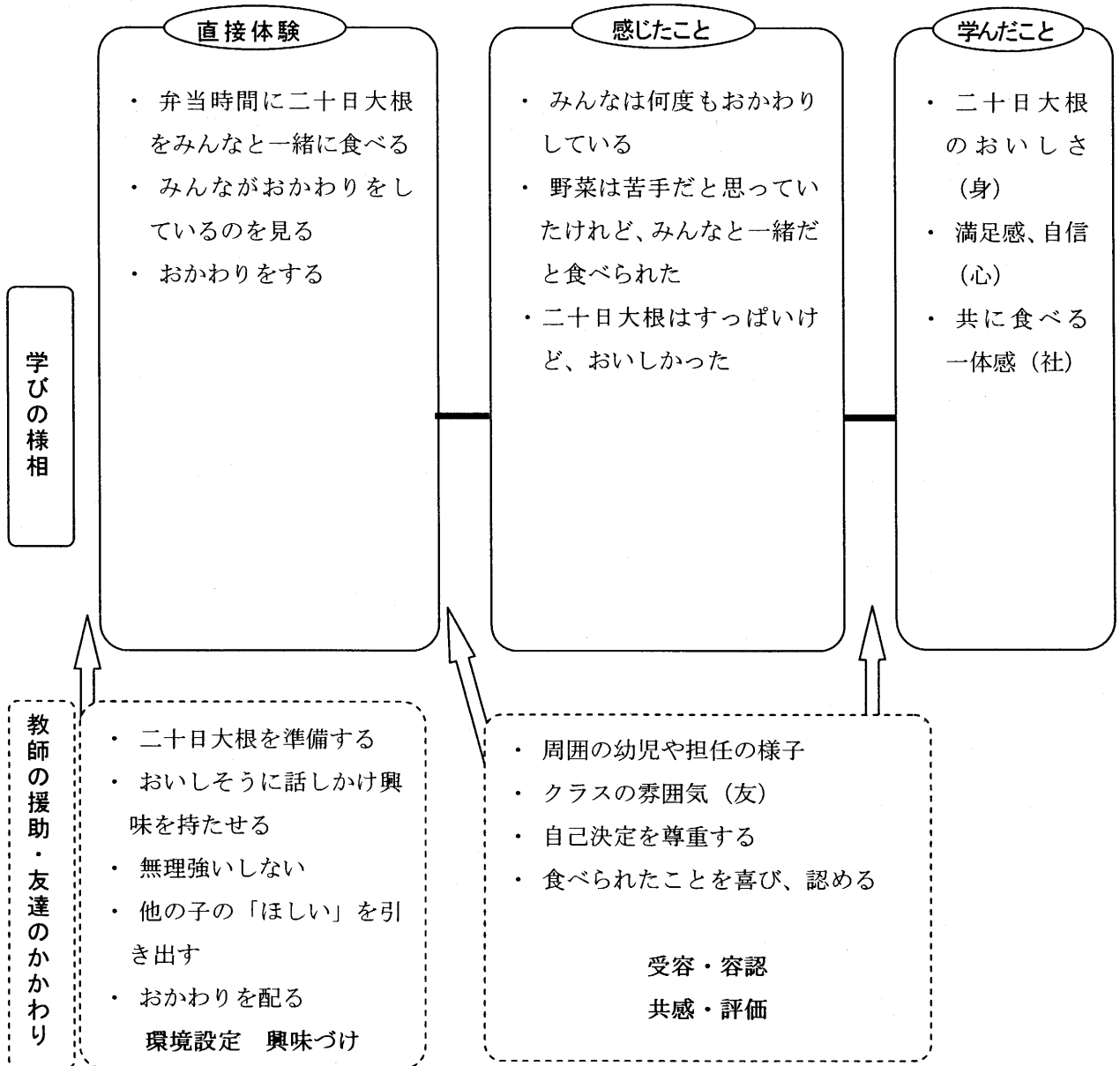
養護教諭 「わあ、うれしい。N児くん。食べれたね」

N児 「うん、すっぱいけど、おいしかったよ」

### <N児について>

野菜をあまり食べないので、お弁当に困っていると母親が話していた。確かに、弁当に野菜は少ない。7月に実施した「なすとピーマンのみそ炒め」の試食では、1口なめただけで、それ以上は食べられなかった。ただ、「幼稚園のきゅうりは食べられる」と話していたこともあり、食べてみようかなという気持ちは感じられる幼児である。

<「学び」の様相と教師の援助>



<今後に向けて>

食べられた満足感や自信を次回の活動につなげる。食べ慣れないものにも挑戦できる環境を設定し、共感する。

畑で収穫した小松菜とさつまいもをみそ汁にして食べるようになった。各自お椀を用意し、教師が配膳した。おいしいと言う声上がり、食べ終わった幼児がおかわりをし始めた。おかわりを配りながら、T児のグループのところに来た。

T児 「小松菜が少ないと食べられるんだけど」  
養護教諭 「そうなの」

T児のお椀の中には、小松菜だけが残っていた。  
みそ汁はおかわりしたいが、小松菜が残っているので、言い出しにくいのかなと思い、提案した。

養護教諭 「じゃあ、汁をおかわりしようか？」  
T児 「うん！」



そう言って、T児はお椀を差し出した。

T児が野菜を口にするだけでも大きな経験であると感じた。残った小松菜の量を見ると、全部は食べられないだろうと思われた。そこで、離れた場所でお椀に残っていた小松菜を出し、2～3本の茎を残して汁をたし持って行った。

養護教諭 「はい、どうぞ」  
T児 「ありがとう」

T児はお椀を見てほっとしたような顔をして、食べ始めた。  
しばらくして、T児の近くのQ児がなかなか食べ進まないで声を掛けに行った。

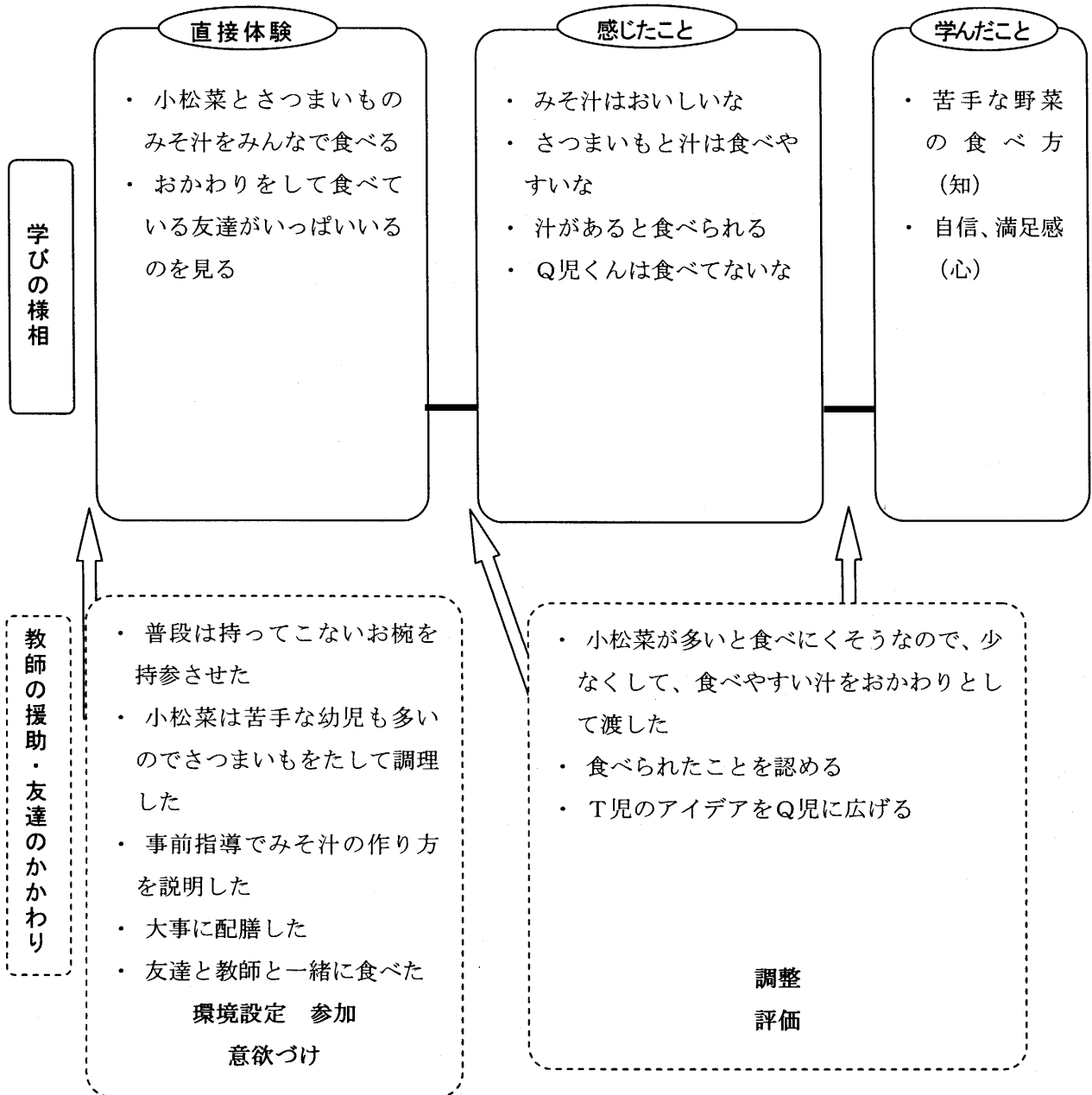
養護教諭 「Q児くん、もう食べれないかな」  
Q児 「う～ん、どうしよう」  
T児 「汁を多くしたら食べられるよ」  
養護教諭 「あ～なるほど。あら、T児くん、全部食べたんだね」  
T児 「うん、そうだよ」

T児は誇らしげに空のお椀を見せた

### <T児について>

行動全般にまじめで慎重な面がある。食べ物に関しても、慎重で、食べず嫌いが多いようである。宿泊体験でも、具をまぜたご飯は食べられないと母が申し出、おにぎりを持参した。しかし、みんなと同じ食事を半分ほど口にできた。幼稚園で野菜を食べる時には、かなり抵抗があり、ほんの少しなめる程度であった。

<「学び」の様相と教師の援助>



<今後に向けて>

今回は教師の援助が先行したので、次回は本人に選択をゆだねて、自分でできた実感を持たせる。

年長組で手作り昼食をすることになった。おにぎりを自分でにぎり、おかずとともに食べた。食べ終わったら、おかわりをしてもよいことにしたところ、たくさんの幼児がおかわりをしに来た。そんな中、普段どちらかという少食のU児が自分からおかわりに来た。

U児 「おにぎりおかわりできる？」

養護教諭 「いいよ。じゃあ、ラップをここに置いて、ごはんを乗せようね」

U児はしゃもじでご飯を一かたまりラップに乗せた。

養護教諭 「塩はどうする？」

U児はまだしゃもじを持っている。

養護教諭 「うん？」

U児 「もっと食べたいの」

養護教諭 「もっと？」

U児 「うん」



U児はもう一かたまりご飯を乗せた。しかし、まだしゃもじを持っている。

養護教諭 「えっ、もっと？」(笑顔で驚きながら聞いた)

U児 「うん」

養護教諭 「お腹は大丈夫？」

U児 「うん大丈夫」

養護教諭 「U児ちゃんがこんなに食べるなんてびっくりしたなあ」

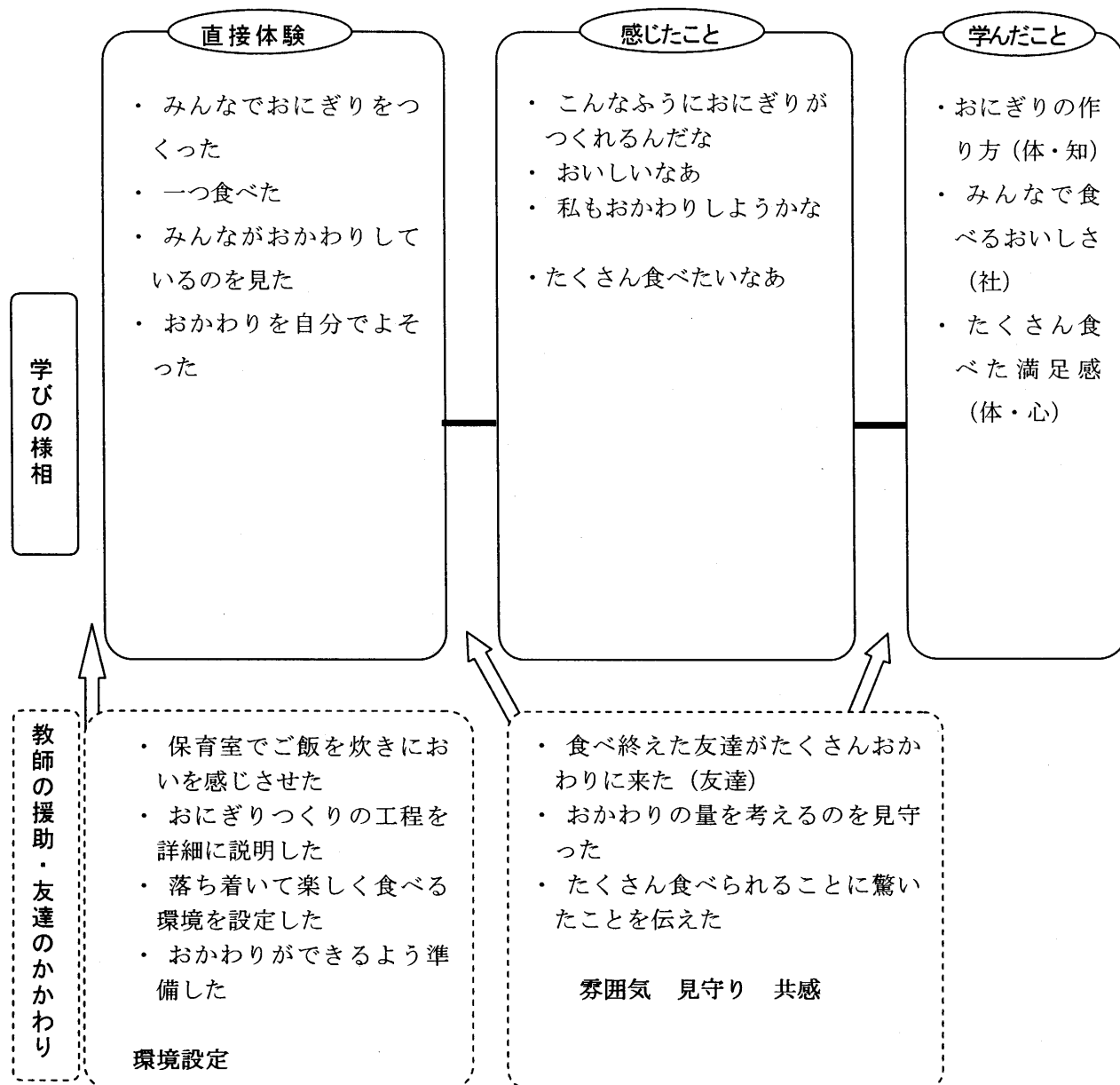
U児 「だって、おいしいんだもん」

U児はそう言って、養護教諭と目を合わせてうふふっと笑った。その後U児は大きなおにぎりを満足そうに完食した。

#### <U児について>

進級したばかりの頃は不安が強く、行動がゆっくりで慎重であった。お弁当時間にも「もう食べられない。残してもいい？」と言うことがたびたびあった。少食のためか便通も悪く母親が心配している時期もあった。

<「学び」の様相と教師の援助>



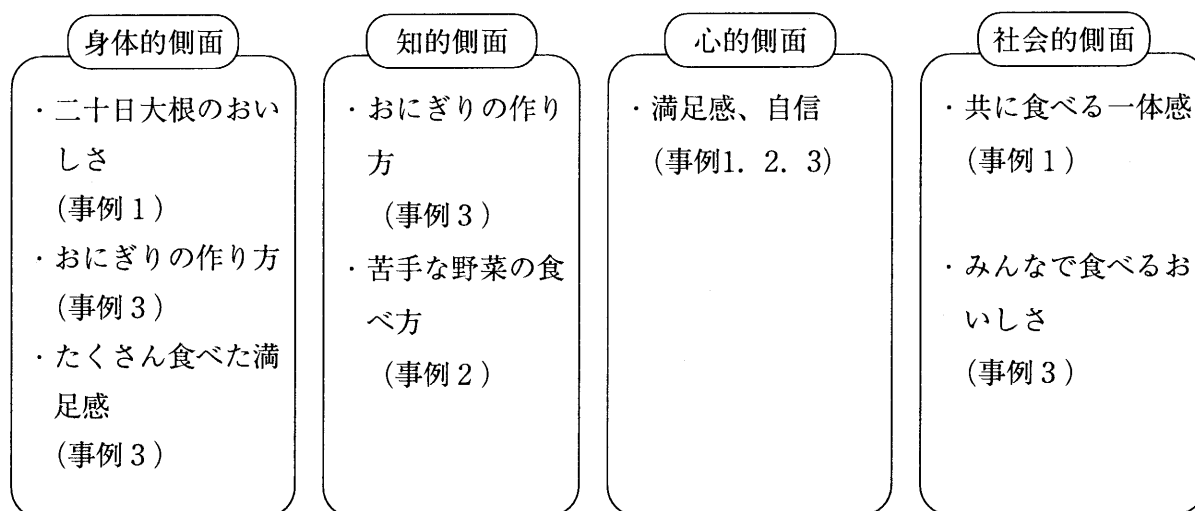
<今後に向けて>

みんなでつくったものを食べる経験は非日常の楽しいことで、普段あまり食が進まない幼児にとって、たくさんおいしく食べる機会になり得る。食べられた自信を今後につなげるような援助をしたい。また、他の幼児にも機会を設けたい。

# 食育事例のまとめ

## 1. 「学んだこと」について

### ～ 「学び」 につながる 4 つの側面 ～



- ・身体的側面をみると、おいしさや新しく知る味、においや満腹感など、まさに五感を通しての学びである。また、自分でつくることでも力加減等技巧的なことを学ぶことができる。
- ・知的側面をみると、実際につくって食べることでつくり方や食べ方を知ることにつながった。
- ・心的側面をみると、苦手な野菜を食べられた自信やたくさん食べられた満足感などが得られたと思われる。
- ・社会的側面をみると、同じものをみんなで食べる経験が相乗効果をもたらしている。苦手なものでも雰囲気によって食べてみようかなという気持ちにさせたり、もっと食べたいなという意欲が持てたりした。幼稚園での食活動は、個々の食事や家庭での食事と違い、社会的な学びが生まれる。

## 2. 教師の援助について

- ・直接体験につながる援助としては、食の活動を設定すること、そのものに意義がある。自分で育てたりつくったりすること、調理の際のにおいや音が食べたい気持ちを引き出す。幼児にとって適切な教材の研究と準備が欠かせない。
- ・感じる、学ぶための援助としては、「おいしい」と言う友達のかかわりが、さまざまなことを感じさせているので、それを見守り、共感することが教師の援助となる。食べられたことやおいしいと感じたことを共に喜び評価することが重要である。経験したことにより、これまでの認識が変化し、食べず嫌いが解消したりたくさん食べて満足したりしたと思われる。